

ドウシイ

奄美市立崎原中学校 一年 達村 心美

「え。みんなには見えないの。あそこにケンムンが座っているのが。」

私の名前は、森岡優良。奇跡中学校に通うごく普通の中学生。兄の名前は森岡雷。今日は父、母、兄そして私の家族全員でとなり村にある滝を初めて見にきたのだ。初めての家族旅行に前の晩は、わくわくしてなかなか寝付けなかった。その寝不足の私に、滝までの道は、そうとうきつかった。ごつごつした石や岩も多く、コケが生えている場所では滑りそうにもなった。ようやくたどり着いた滝の目の前に大きなガジュマルが生えていた。

「ねえ見てよ。一枚だけ葉っぱが動いてる。」

と、お兄が言ったので、みんなで顔を上げた。

「本当だ。どうしてなのかな。」

「不思議ね。」

と、お父さんもお母さんも言うので、私もガジュマルの方を見てみた。すると葉の上に、毛むくじやらの昔絵本で見たことのあるケンムンが座っていた。驚いた私は、「わっ。葉の上にケンムンが座っている。」

と大声でさげんだ。

「えっ、うそ、どこどこ。」

とお兄が言った。

「どこにいるのかしら。」

「いないじゃないか、見間違えたんじゃないのか。」

とお父さんやお母さんまでそう言った。

「えっ、見えないの。あそこにケンムンが座っているの。」

と私はみんなに向かって大声で言った。

「大丈夫かしら。昨日、ちゃんと寝なかったからじゃないの。」

とお母さんが心配そうにたずねた。

「みんなには、本当に見えないの。」

と聞く私に、みんなは声を合わせて、

「見えないよ。」

と答えた。私は悔しくて、声をあげて大泣きした。すると、泣き声に驚いたのかケンムンは森の中へ行ってしまった。せっかく苦労してたどり着いた滝だったので私は泣き止んで、滝の美しさや迫力を家族と一時間くらい楽しんだ後、家に帰った。

その日の夜。

「はあ、今日は疲れたし、早く寝ようっと。」

寝る準備をしていると、窓からコンコンと音が聞こえた。

何だろうと思った私は、そっと窓を開けた。すると、
「こんばんは。僕は昼間に会ったケンムンのケンです。」

と、昼間に葉っぱの上に座っていたケンムンがあいさつしてきた。驚いた私は、

「えっ。」

とさげんでしまった。その声に驚いたお母さんが、

「どうしたの。こんな夜に。」

と顔を出した。

「な、な、なんでもないよ。おやすみ。」

と、ごまかすように言った。お母さんは、

「それなら、よかった。早く寝なさいね。」

と言ってドアを閉めて出て行った。

「ふー、良かった。バレずに。」

と安心した。

「ところでどうしたの。ケン君。」

「僕と友達になって欲しくて。」

「どうして人間の私と。」

「実は僕…、ケンムンの友達から嫌われているんだ。ずっと悩んでいた僕の前に今日君が現れた。普通、人間はケンムンの姿は見えない。でも君には、僕の姿が見えていたから友達になれるんじゃないかと思って、ついてきてしまったんだ。」

ケン君がそう話した。ケン君の話はよく分かる。実は私もクラスではいつもひとりぼっち。いつもさびしい思いをしていたからだ。

「ケン君。今日から私たち友達だよ。よろしくね。」

私がそう言うと、ケン君が泣いた。

「ずっと、友達がほしかったんだ。君の名前は。」

「私の名前は優良。今日から優良って呼んでね。」

次の日から私の生活は一変した。みんなにはケン君の姿は見えないから、一緒に学校に登校し、一緒に授業を受けた。休み時間になると、ケン君の好きなことや得意なことなど聞いてたくさんおしゃべりした。いつもはクラスの端っこで、一人で本を読むしかかった私は、学校へ行くのが楽しくなってきた。だって私はもうひとりじゃないから。毎日こんな日が続けばいいと思っていた。

そんなある日の夜。お父さんとお母さんから大事な話があると言われた。何だろうと不安に思いながらリビングに行くところ、

「お父さんの転勤が決まったから、奄美から引っ越しすることになったよ。奄美で過ごすのはあと一か月くらいだから。」

「えっ。」

私は驚きのあまり、それ以上言葉が出てこなかった。引越しするということは、もうケン君と一緒にいられないということ。悲しいけれど、ケン君にもこのことを伝えなければならぬ。

次の日。

「ケン君。」

とそつと声をかけた。奄美から引越すということをお話そうと思った。でも、私が引越しをしたら、私もまた友達がいなくなるけどケン君もひとりぼっちに戻ってしまう。そう思うと、次の言葉がなかなか出てこなかった。

「なんでもないよ。ごめん。」

すると、

「なんでもないよ。今日の優良はいつもと違うよ。何かあったんって言ってよ。だって僕ら友達でしょ。」

そうだった。ケン君は私のたった一人の友達だ。親友だった。

「あのね。奄美から引越すことになったんだ。」

「それで優良は元気がなかったんだね。僕のことを心配しているなら大丈夫。僕には優良との思い出がたくさんできたよ。僕は優良と過ごせてとても幸せだったよ。」

涙目になりながらケン君が一生懸命に私に思いを伝えてくれた。

「僕だけじゃないよ。優良もきつと大丈夫。新しい場所で僕のような友達ができるよ。最後に優良にガジュマルの苗をプレゼントするよ。元気がないときはこれを僕だと思って話しかけてみて。きつと、たくさんの僕たちの思い出を思い出して、元気になるから。」

ケン君はそう言って、私にガジュマルの苗をくれた。

あれから二十年。私の家の庭で大きくなったガジュマルが今でも私を見守ってくれている。その木陰で私は子供たちにケンムンの話を語り始めた。